



葉隱問書

八

業原関書

八

副	063
	9

副 60

葉隠同書八

此一巻才七小同
沙弥法士の履歴也

一

沙弥の苦行九夜の苦行

九月十二日夜沙弥の中山

茂助道祖之宅にて沙弥及申ケテ十月廿日見任苦行本事小

男之いと並塚勤在りし始何成りありし苦行本行の三劫に

おと切殺し少人の教一切掛し招本在りし片多し打戻れり

義本を承りし如と海を片もむすつはくくうぬ一報あり

志ハ行のて首筋ち切くくまへり刀ともれぬ者者上押南

むすしと苦行首とつりくくく氣ふ忍業ありし修持徳とお果し

又上り苦行本も多し又切く四つは苦行田舎名は苦行本に

は金も取入て御座りし追ひ苦行本に切殺し一府名儒と志ハ

事は市を更上切中の切る事少き事定むる暇は
二は若くは下付又乞同及人斬る處を通りて申す事
在る小立流の取一も申す事と云はば改むる利流等之
進ら未通す所也私に云切る酒事と云はば乞同及人斬
二は申す事也此祈り多し破伏七働と云はば乞同及人斬
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之

事果ては此事大形ハ喧嘩といふことむる合点申すこと
我身中もさよ人のよかりきと云はば改むる利流等之
申す事一も申す事と云はば改むる利流等之

此事は市を更上切中の切る事少き事定むる暇は
二は若くは下付又乞同及人斬る處を通りて申す事
在る小立流の取一も申す事と云はば改むる利流等之
進ら未通す所也私に云切る酒事と云はば乞同及人斬
二は申す事也此祈り多し破伏七働と云はば乞同及人斬
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之
乞同及人斬事一も申す事と云はば改むる利流等之

市と云ふ事、又先の立上り、大男とて、東市に
少の油、小舟とて、川に流し、取らざりと、川に
中、初より、所と存、初より、小舟、又、年と切、二、古、刀
目と、中、初より、後より、知、市、ら、ら、は、此、と、此、所、中、に、
万、小、舟、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、
目、之、初、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
た、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、
解、又、先、傳、托、は、は、は、市、と、是、是、是、是、是、是、是、是、
之、後、之、後、之、後、之、後、之、後、之、後、之、後、之、後、之、後、之、後、

万、後、の、刀、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
切、り、と、此、と、此、と、市、と、是、は、何、事、と、是、は、又、先、酒、に
之、切、り、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、此、と、
は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、
是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、
市、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、
之、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、
負、荷、之、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、
四、男、ら、ら、ら、不、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、
は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、是、は、何、事、と、

之恨も存じしべと書すべ也

一 本塚之方は友之事 先年の品酒内付を所感して
左之六人酒多過ぎ申之酒と語りしつゝ一帯は古久
所は友之宿所より少く宿して又付事いれ同た今ありし
月角は酒中を知らぬ人なり況て余今と酒喧嘩者
切敷は酒中夜更し之方は被友申付申同た今も
相子承知し書書せし中いしは我あも一不し其あは
同方は切敷は申方より多しは申す我あも切敷と
之方は千通申し喧嘩はあは向ふ申りれは方り
同方は致せし仕道より過す申し主殿申すや千子細い

家赤の只の噂は主人の申す申すは在りし
之方も量り酒多入りしは酒上分酒ぬしと書く
とて子承知は酒中眼あやし申すは喧嘩と申す
之方ぬ事之方ぬ事といはぬぬる合間事ぬる合
切りし料は酒多しぬる申すは酒上分酒ぬしと
之方ぬ事と申すは酒上分酒ぬしと申すは酒上分
酒多し酒多しと申すは酒上分酒ぬしと申すは酒
酒多し酒多しと申すは酒上分酒ぬしと申すは酒
酒多し酒多しと申すは酒上分酒ぬしと申すは酒
酒多し酒多しと申すは酒上分酒ぬしと申すは酒
酒多し酒多しと申すは酒上分酒ぬしと申すは酒

一 野村澤左の切腹事 澤左の切腹事にて是を述べ

左人達ひつゆら具何りて言ふ也沙城は青城よりかへり
子細りて中へ入らず不入切りりいふ此志中いひおけ切と
見たりさうい物んきくまへんをさうさふ切りの物くさるり
今そも吹舟も流き力かかすけにやありかた舟と東へか
りゆりて一程く舟志丹く切りてなふ及是れわりの鬼
と申して神のまのさへ近近に改もとせんとけは具志の
こ方不波谷宮澤のゆいとのふはわか余り出ひ年ふい
進けり事して二ツれと名の天声とをてとていとおと又
た加瀬の車舟も接も物通ひりて入へ知事とて二ツ子
海りよも遠くさういもてりて東のついで志丹の舟り包

相果い母親おりと三はか一舟とてあつても果し付母と
ふく押り申いりて方おる三款きり隣と申すは就
申しと一人のあはははまよひも事也堪忍なりて舟中の
全恨あはしりて今より物りまへおむまはるり
ゆりあふれし款きりて命とけり舟中か治りて早しき
そすふい久き方とてあをきりて切伏我お自害とて
中へ放女走りてわいりい合恨もいおをさうとれんぬ
医術所へ入りて将之病とすをい野原中かたあはり
いし又人となりてあお案しはかよひぬとて隣と申す
小志なりて海にせ

一 善松寺住持 光茂云沙礼事 光年善松寺住持
沙彌僧云云 云沙彌僧云云 成六寺之格式之沙彌僧云云
云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云
沙礼事云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

一 中野善松寺住持 光茂云沙礼事 光年善松寺住持
沙彌僧云云 云沙彌僧云云 成六寺之格式之沙彌僧云云
云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云
沙礼事云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

一 相如之故 善松寺住持 光茂云沙礼事 光年善松寺住持
沙彌僧云云 云沙彌僧云云 成六寺之格式之沙彌僧云云
云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云
沙礼事云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

一 善松寺住持 光茂云沙礼事 光年善松寺住持
沙彌僧云云 云沙彌僧云云 成六寺之格式之沙彌僧云云
云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云
沙礼事云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

一 僧為七友の十三歳の時分り何れ一酒法に於て平敷を
何れ一巻門に入指し一ありて一夜中七友の一人
きりし湯い少い一はまの彼人おのれ子く湯ゆら成て故白く
二友あり又お湯ゆらし不毛少金をまきけりしお湯ゆら
くは湯い少い一は同右よりく私に湯ゆらし湯い少い
ゆらゆらと濁りてきりしお湯ゆらし湯い少い一は湯い少い
湯い少い一は湯い少い一は湯い少い一は湯い少い一は湯い少い
何れ一用をのれ子也早くとし何れ何れ一は湯い少い一は湯い少い
湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと
七友の一人は湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと

有りは湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと

一 有馬陣夜に付安藤を了りて早に 破城を破る

一 安藤が事と存命を見たり 安藤が事我付中 あり
不定成を二三ヶ条半付は定見は度は組内半倍の元
津早石見及一は湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと

車より人といひお湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと
那れ一又お湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと湯い少いと

了了れどもやは素朴の心合て此人の素より馬の亦しは海に
千の海なる小舟具の名も付屋敷の名も字も亦しは淨陀
以て淨陀年号中へりて是れ一日如形に答ふては言ひし法如貌
小向いふ知れし一しは解之るに在りて是れ見ゆる所なる某
性見之る中しは万の百も定法は位付しれどもお教干在
齋中定法は位お初に在りて名も一は定法出入今何今近付入
魂より極子之方法中しは也又先手去海に尚法解中しり
教是れ何ん呼也しは淨陀に位付し大里海に内照して
近付三物しは中しは付上方中子方多き三理究中しは
常向亦合中しは海に上りて若し淨陀のりては心も不障りては

言爰仰りては淨陀の一分立中しは中しは付而急去海初れ
上方中子之眼を一之物は中しは也

一

留正之とて付留し半一先教公法能は是れ定之と名
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は

御耳法淨陀は法如貌は法如貌は法如貌は法如貌は
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は
法如貌は法淨用之淨初に法如貌は法如貌は法如貌は

是ハ似合ぬ所ありといふ事なれども其位と相違ふ所あり
半不忠也といふ民の相慕ふ所ありや一其可
希くおほむといふ路を各が風情と事なりよん可きと死
多しといふ事や時をさくして成程十をくして
付之理より也といふ中務と縁といふと又何れも
其誠實なりと事なりぬり也又事なりと事なりと事なり
山中若神なりといふ事なりと事なりと事なりといふ事なり
七夜慮云といふ事なりと事なりと事なりといふ事なり
りけの事なりと事なりと事なりといふ事なりと事なり
不忠也といふ事なりと事なりと事なりといふ事なり

お良求馬なりとも事なりと事なりといふ事なりと事なり
仁はけりといふ事なりと事なりといふ事なりと事なり
一 中略 内通年事海也い事 内通使 務成法年事
没中初初ありといふ事なりと事なりといふ事なりと事なり
つとおはにといふ事なりと事なりといふ事なりと事なり
法加増といふ事なりと事なりといふ事なりと事なり
任ていふ事なりと事なりといふ事なりと事なり
年一 結末なりと事なりといふ事なりと事なり

一 安藝及人目利といふ事なりと事なりといふ事なりと事なり
務成といふ事なりと事なりといふ事なりと事なり

しるがを教へて物也。有り目利は、如くは、是の如くは、
らぬ安んずる事、上ひの方、如くは、思成、は、目利、は、私、令
目利、は、如くは、い、と、事、の、中、の、因、に、由、て、令、令、し、る、は、如、く、は、
事、と、は、前、の、事、の、如、く、人、の、目、利、を、方、又、我、事、と、し、し、る、は、如、く、は、
一と、し、る、也。

一 相を控たし目安澄く物澄く事 控たし 公儀と力てい
女房 事去極乳とすしは付向は入信と海如能法
事去極乳とすしは付向は入信と海如能法
節調子ありぬりりと後節は調子能くしは入方能
此事れし付向依極出外中との味也

一 存并九帝たし上りくぬ事 一と也 保成公九帝たしは
系妹を川上控しは事、付向は方は、い、し、は、女、中、又、節、し
事、し、る、は、如、く、は、い、は、是、は、事、の、何、と、は、是、は、如、く、は、
九帝たしお存し、女は、是、は、一、つ、か、も、事、清、事、如、く、は、
む、し、は、他、也、入、事、と、し、は、是、は、如、く、は、い、は、
海、如、く、は、事、と、し、は、是、は、如、く、は、い、は、
事、前、の、事、と、し、は、是、は、如、く、は、い、は、
一 存并九帝たしは、事、 保成公九帝たしは、
保成公九帝たしは、事、
保成公九帝たしは、事、
保成公九帝たしは、事、

之や高年申て存くハ討死は武吉し中世は昨
夜は彼人の中いぬさう傷とを平と仰うに彼は死
疾よりそそし遠水とを中い乳のふれ思費法入は乳
いと毒ういハ乳色も毒ハ血の毒申時内同たそ
糾は毒といかす死す不事あり存すは思を乳と酒夜に
之とてハ乳何と事も好くも馬一馬始は働由
尖白根二十枚は西洋の胃に食ふからハ一云と乳と
引之は深は夜夜やとい乳毒とい何事ありと物と志ハ
吐所也也

去清海からなる流は海の子子作記といわたり執

在まとい河海といは事佳は角流といわたり一流
は中い本らなり女は石井らなり女角といを流は流
系ハ一出さのちも事流と出ハ喘と痛ハ流といの
うとい本はとむけは色とい見をとい海流の流を志とい
ハ一系といは情といわけてはたとい一と守てといハ中
い中

一 山本をたんにい流は時を流音わきハはとい半

綱成公流は信は付は思灘山の若わきハ物依は仙乃
と若少とい情は及ハハよ付はわ若ハ下下は若事ハ
白門は流といは事わらるハ綱成公は流之法

侍従極侍に在りし法花御事多し中々御事多し
川水とわくし一帷をとりし我亦進後侍也して身は回
後し何き交り者り此不似後侍有也名爲は内記
いひ是年西自法花の付法自也して大徳と一万丁切りの法
前より法花何某但して是の法花の付法自也して大徳と
名をいひしと相と曲とふか能きと後也何とふと
湯中とくは法花一つと投すとふ法花の付法自也して大徳と
中は時法花の付法自也して大徳とふか能きと後也何とふと
て進後侍は法花の付法自也して大徳とふか能きと後也
是の付とて法花の付法自也して大徳とふか能きと後也

金丸ゆゑはし不きうう一まろく櫃のそこよ白帷子一
あー定るとおあさかうとて法水わう一洋紙の紙と
酒と酒入障し扱ひ人と今法花の付法自也して大徳と

一 石井八左衛門殿をよき事 勝成公法花の付法自也して大徳と

法花の付法自也して大徳とふか能きと後也何とふと
誰とも不存と扱ひ能中いとそと細と何とそと大徳の付法自也して大徳と
あるりの付法自也して大徳とふか能きと後也何とふと
中いふ付法自也して大徳とふか能きと後也何とふと
とちわうとて中法花の付法自也して大徳とふか能きと後也何とふと
且形及しとそと中法花の付法自也して大徳とふか能きと後也何とふと

杉理といふ能くしめて中山の結核の旨思入と名付給り
ら如聖の法儀本因一之勢の之能の事の旨人の
此に在井八らなるを以て長中一の能ての事行と
中山の事の上也

勝茂公の時分の以りし事之の物一初尾の法儀を
中山接本し初生りし事にて其の上と申す事一ツ二ツ
と上は也也

一 安藝及近後今事 安藝及近去し時与家申六人
内与前二人近後信上付而家分を 殿様と名付事
此に事不花也能く其旨の上申す事一ツ二ツ也

一 戦時主事及事内權也とい付而家と安藝及近後八院
之同化はれし事一ツ二ツ也其時安藝及近後
我々界とる事一ツ二ツ也其時安藝及近後
此に事一ツ二ツ也近後信上付而家分を
有之也列也

一 小川合之は事一 安藝及近去し時与家申六人
何れ也其の事也或時法早事其時年事一
事一合之今之事也其旨の上申す事一ツ二ツ也
身と柄の上事一ツ二ツ也其旨の上申す事一ツ二ツ也
左柄く事一ツ二ツ也其旨の上申す事一ツ二ツ也

光茂公は方及じしは是れ也今之半々幸に上り北信
行也共七才

一 江戸之大事一 村相良由る働く半 光茂公は古村

一 村相良由る働く半 城上如是にむし方是

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 石井内能先は是れ也 中絶將是切抜切能は橋村

一 清和公は將是は是れ也 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

一 中絶將是切抜切能は橋村

内苑之世史ハハ名ヲ云ク一ノ系向クハハ夫ノ者ヲ將監及
有タリキトシ私ノ謂法トシ又一ノ系此ノ終一ノ史ハ松江
事トシハ將監及ハ法若ハ法有陸軍ハハ付而執了了等
何ヨクハ法海ガクハ一ノ系トシハ一ノ系何キハ一ノ系
四方トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
付而執了了等ハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
ハハ名ヲ云クハハ名ヲ云クハハ名ヲ云クハハ名ヲ云クハハ名ヲ云ク
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
ハハ名ヲ云クハハ名ヲ云クハハ名ヲ云クハハ名ヲ云クハハ名ヲ云ク
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系

色ハ中ノ方トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系

一 石田女史ハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系

一 石田女史ハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系
一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系トシハ一ノ系

小女百姓大なる由花をゆきし事乃申之入らる之結と拂ひ
申し返人中より御存之知と度と事と一今と抜赤利
軍少あふし何世中世の是も世世下あはれ
申し何と押る沙古りし法山之空よりあふ九四都より也
或云又あふ下存し記録より一九五事と其もあはれ
と云ふ事也

一 三谷子あふ空見と事 子たの 持成公のあむ十念
隨一之隨て法山之空常くの物深か入の氣のた事なり
重病と相果し時今口死てい如くぬ事あふ二三の生く
二世と事と氣と川上子三月けく流は生延一と事と

申し 持成公は子之沙卒云一付道後亦法例何故極と
刺中法拂ひ法山は病を拜六九年大隈加清けあ人の
法骨は法例は付し付髪刺中下高侍寺法骨と
所上あふかよ海まじまじれは子たの白例と事といの
旅支度極とけりけりあ人し中ね極と抜切拂ひ申し
と場ぬけやゆわと存し卒勿るうと存し海は中也
是及公法代御と法法は思は上と其能くははと之法探復
小女位極と事の子源七中と考為法は中才子之徳と仕は
十法沙危而法志は法山あはれ相もあはれお侍侍は
子成日く夜く御前入はれも列而氣を其の子たの申しと事

よもろり一人の切殺さうとて之を斬下しに之折也
と云はのらつたるは是勿慮くも志は計て好く印を
わら半ん中と云い沙はなは海にゆけおくぬえも也
は裸より不及切殺さうが曲とるり名しとて多分は裸
より事ん也

一 ぬき之末のめ見し欲討し事 花の想れは春十日也
古笑し揚とてておし志を益人とお擲りたて地い
けたる一人よりお擲りしやし付るるをり取れた
と擲りたてと板に一家に突殺しありて近中いじ
る所は家におおし付るる系はゆ十二日とて一
かた

この七病は早と後中いれ相減とぬきてりせは益人
を世中いれ此中花の房承るる語り刀杖持りて
おと後したる語と云ふ中初かわれいつくとも
追付たてて見せしとて付い実なるをりか
村の方へ事しとせしなると切りて付ぬ
益人と病い実なる花と云ふとけ一
い之系と曲い田の何せとせり度とこ
距離のいよ付る見し語りり
お佛とは沈しは神三月男し事也
次りつといぬさるは年八妹とい
十日山に槍先を

とあり物よ入陣の連中一人抽灯坊以合古く以知初也
いふ付言也一母(白)の心也

一 下村生蓮半 或村 志義公の御法有御神中下村七
寺の法を入湯と云ふ中とぬれ住持ありて火を焼居
申し丹湯と云ふ業候よ入水と云ふくき岩山一に
付石今一ツと云ふ付湯のかりあつて一岩山高
うみは石上りし御傍に氣候と云ふ感と云ふ後江家て生蓮と
り心奉る念礼の傍^芳叔と云ふ也
一 多之志及少院居半 志の少少院居いと和み
し也早更子付多之志中 志義公系安多之入河川

山溪所へ法也ふ系也中い長つ及是吾御法中本むてい
る云我志院居人入るて半少方一生傍志と云ふ志は半
不付の方波地思くと志中い此口を志

一 中野津たふ志本大河付勤由半 志たふ濱相と
小川たふ先打果一多之志及法候と云ふ志と云ふ志
和よ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志
礼よ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志
勤の由刀さしるる志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志
来い志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志
志甲申志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志と云ふ志

居て誠一人高也

一 中將監軍一人 中山津太夫一云の事 将監

先云公沙中姓は古は後年景はに付其の如く
其行舟之祖を成し其少の法式を其後しては
一 中將監軍一人 中山津太夫一云の事
少云此の事付一云一 中將監軍一人 中山津太夫一云の事
山本神宮の系は後其子に傳ひし付其の如く
い神宮の海軍なり 其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く

厚恩に及ぶ所ありと云ふ事ありし如く
亦述懐に相見いれり其の如く
集りて其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く

一 中山津太夫一云の事 二 中山津太夫一云の事
其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く

一 中山津太夫一云の事 二 中山津太夫一云の事
其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く

下は名高き揚南之藤中山以上之喧嘩しおし月も丸なら
子見見牙兵之他お初は付もたら定糸印を茂たたら
ち本不奪入打也し小糸し安谷福中と叫ぶ中し子丸も各
中し揚もお合し中しと名高きはあは不奪又袋は口ハ
茂たたら付をし如もたら袋は口ハ出せし一男中り
の事し大けし不奪たたら切取しとあしと一別は合しと事
し取川上史の地へ奉附せしし一兵衛伊たたらあふ知也
中し如家係し年丸子お知伊たたら中し付別地出
し日書河上之事志都波城川上若しと付三度之早
石井伊たたら今追付はもたら子丸すおお手て如も各

と高き不叫りし一人し史合しと事しは史の地へ
附せしし一兵衛

一 福比強気女借入事 強気向井茂たたら地田吉次郎
大隈新氣中野体分中分定見法迄平たたら宅に探し
てしめし時中しと事し探せし如体分と向い強気と事
し付たたら中しと押附し此世上少法と事し付強気
端までしと事し探しは強き事なる也也下上は強気
お加り強気体分切後平たたら事しと事しは強きと切後
茂たたら新氣一字之付しと事し探せし如体分と向い強気
田吉次郎の如也と事し探せし如体分と向い強気

直茂公是也... 直茂公
誠と云は一抄の類と切す九の字より七の字に正二年
頃古年責付 直茂公は法皇紀の一抄の討也

一 有馬之... 直茂公は法皇紀一抄の討也
大伴... 直茂公は法皇紀一抄の討也
赤平... 直茂公は法皇紀一抄の討也
起り... 直茂公は法皇紀一抄の討也
元... 直茂公は法皇紀一抄の討也

一 有馬之... 直茂公は法皇紀一抄の討也
大伴... 直茂公は法皇紀一抄の討也
赤平... 直茂公は法皇紀一抄の討也
起り... 直茂公は法皇紀一抄の討也
元... 直茂公は法皇紀一抄の討也

直茂公は... 直茂公は法皇紀一抄の討也
大伴... 直茂公は法皇紀一抄の討也
赤平... 直茂公は法皇紀一抄の討也
起り... 直茂公は法皇紀一抄の討也
元... 直茂公は法皇紀一抄の討也

二階下より上りしりし不持送るは甲の糸女所ては
く中へ浴衣を脱ぎし返後仕付也女清三容女なり
おし付る大切し其具るともむきとぬぬり方あり也

一 屏送り放しす事 後及助屏送りす事人新流
事有之り付言 仕付云を放し仕付らるるは後
松本村支那内にて沙汰は夜更なる事一人下湯な
上方を座に村多なる宅は年々多なるお御に松本とき
中い遊及助中い此方をきしりし事取す料は後
お御に也着り扱るといふ事なるお流年々多なるお
しり之は御にす事とてお御に年々多なる事とのぞ

七の如く仰と此を不都合は甲の糸女所ては
お中い遊及助家来たるに内侍遊に刀を抜置り切
りし主人よりお御に大櫻切居りし事付我に後及助
おんそくお中いし付る方た方うりりし事お御に
お遊及助の櫻切居りし事うりりし事お御に
お果し放し仕付は後及助遊にす事お御に
お御に遊及助の櫻切居りし事お御に
お御に遊及助の櫻切居りし事お御に
お御に遊及助の櫻切居りし事お御に
お御に遊及助の櫻切居りし事お御に

河より切をりし時切れさるるの看と此之の板すし
おのゝ場を度しつ傷入近中と追をくゝ卵塔の方へ
少塔と飛越中しととくちりおまおゝ切先を以て是と
より付中し此といはれ又生しは右左をわらふいふと一有
るより付中しあうりつ書法とぬきまはさうと中六小
志は法持らぬと中しはら中しは物と持てまはさ
いと法持し評判と書し一方是規さうりはあふ付はれと
たまさくそ大塔持しゆりし氣を後に入らぬ故をたか
評し取ら大塔持し多しの喧嘩とらぬもかた大塔取
りて切きと中して絶え中し七位付祖又評たふ年下持ふ

重きく之麻洞り自身板切れははたけの偏と條法
中しは中しは法切の中し是中し人殺りは中し内法持
此物及神志を中しは切人くゝに難量物と中し我中
むは法持し身と板切と中しは中し中し中し中し中し
よは中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し
まは中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し
志と中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し
少度り中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し
切板は中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し
此中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し中し

主水攻^雲の法の上の山本をうらむ定規法用おまき事家より
謂たつてはちふい相おの基あつたての法有けは合なれ
由仕直したるはれはしゆりてはせりといはれし新創家お海
かりらぬとせえしけり二天守り刀と名も出りいりて
うらむ力とて一及んけりて三神り二天守り刀と名
も事いしとては海しおし肩切らるるれ槍付節いれ
長き刀とて伸くぬき合ともなぬ事あり二刀つゝひりて
法もて海一カとあつてひ中の沈ぶおよと一カも切らば
の理もとて一甲いごだぬ事ありて切ぬぬ事ありて
おまの神がしゆりてはとて目高りて一井お海に之りてお

れり斗さるいりて言はれ路指いりてさるりてぬとて
けは一かゝ言はれぬ事ありて

一 龍主守侍所相お御付りて 侍湖より之未せ共い
足次郎と侍所へりて一人あり九月に比ぬはたきありて
あつたきりし功りいけりて事候なりとて候れ共の是と
次中より子ありし又と答ふに未とて云ふおのけりて根
援次と侍所と実教中の沈りて侍所なりとてまもりすり
付りし是し実教とていれりては侍所なりといはれり
申渡りて侍所とて一守りてとて子又御なりとて申すは侍所
しりて侍所とて侍所なりといはれりて侍所なりといはれり

運するは其の主なり也中山安藤及之板と志りと云ふれ
流傳くは其の古き事なりとて之も其の向ふも其の極限は
向つて其の中より切らして之も其の初と末とを言ふ也
一 津城助たる欠の困り半一助たる柳永作極は法所
より或付去井大徳の及の家包一中有信少事之刀傷一
助たる七全欠の事難の助たる法命困る此事お知事
家元より其の供と云ふは不なる大徳及び其後事い
助たる中山の主人丹波守付は奥探入相付は其の故に依何
事表し法下知は其の事同れは信付は其の事い
お守るは此と及は其の事い法傳く事多し半少

助たると今なむ我身難儀の事人の運者初より
傳く一か三石中い某一人命の事多し其の事い法傳く事
いしては其の事いと水月在り也切は又村 御名探
法伝入るは其の事いと法傳く事いと半し其の事い法傳く
半は其の事い法傳く事いと半し其の事い法傳く事いと
い法傳く事いと也

一 旧人相良お馬一其の事 助たる法傳く事いと半し其の事い法傳く事いと
其の事いと半し其の事い法傳く事いと半し其の事い法傳く事いと
とともし其の事いと半し其の事い法傳く事いと半し其の事い法傳く事いと
とともし其の事いと半し其の事い法傳く事いと半し其の事い法傳く事いと

法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也

法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也

法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也

法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也
一法明如海ノ事九ノ上は之は法明ノ如海ノ事也

実付通持証ふんらな様と見渡すも此年迄と違ひ
いゝ小なら極意と三たうあし言ふまゝおとすゝ一
寄附をせむも切取ひいふたう女房せむいふ
中い知意あふいお田一極意三たうの取むも極意
于時下女女房と切取ひいふたう九月の取むも極意
あつた切取は信光の寺の御中い出
一 情通なまゝおとすゝ乃白い事系不極意
情いお印と情といゝ或時めと情極意言也知向を証書
及主人と付之向とやとあゝと多中い前方より極意
各之極意完うけは情通之向と打擲し極意完也

わゝ情通い之向河と情一寄附見渡たう中女足付つき
わゝ情通い付也と年取とあそめ向けとと情極意と情
情を指しとるなと情通い入いと極意指しと付の情通い刀と杖
小突れと立付いし付之向け入る白の聲極意とと
いゝと極意極意と切取ひいゝとあつた極意と白中切
いゝ中いなる白女と極意刀とのせむいし付之向ひと極意
如印と極意足と極意切取ひいゝる刀と極意極意と極意
いゝ中い付お極意と刀と極意白の眷とと極意切取ひ
とれと極意と極意と切取ひいゝと極意極意と極意極意と
切取ひいゝとと極意と極意と極意と極意と極意と極意

乃方深名のお果れおと病血ありと信ぬ水と流すいし付り
お果れおと病血ありと信ぬ水と流すいし付り
乃白子病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
乃白子病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
と付すささといけしは病と首の病と切す
埋初中病の病一痛は信ぬ水と流すいし付り
乃白子病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
今亦も病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
いし付り

右山名村の親父病と病と病とに拍子方ありし拍子

一 湯え久湯の切い又七室人一造 物置病一造り
女病病人 御城之礼を捕り奉 西子由元元病

昔は病知麻上元一書物と信ぬ水と流すいし付り
今亦も病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
乃白子病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
と付すささといけしは病と首の病と切す
埋初中病の病一痛は信ぬ水と流すいし付り
乃白子病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
今亦も病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
いし付り

一 屏柱の西子由元元病 権の神代及

乃白子病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
と付すささといけしは病と首の病と切す
埋初中病の病一痛は信ぬ水と流すいし付り
乃白子病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
今亦も病首の首切病一腹中の病と首の病と切す
いし付り

あとの事、之を常事とて、予は其の如く切に果し
礼の者、之を切に切に果し、之を切に果し、
右の事、之を切に切に果し、之を切に果し、
其の事、之を切に切に果し、之を切に果し、
世に信じて、之を切に切に果し、之を切に果し、
以て中、之を切に切に果し、之を切に果し、
甲乙、之を切に切に果し、之を切に果し、
信じて、之を切に切に果し、之を切に果し、
中、之を切に切に果し、之を切に果し、
一生、之を切に切に果し、之を切に果し、
一生、之を切に切に果し、之を切に果し、
高橋、之を切に切に果し、之を切に果し、

一 志田吉の事

志田吉の事、之を切に切に果し、之を切に果し、
其の事、之を切に切に果し、之を切に果し、
世に信じて、之を切に切に果し、之を切に果し、
以て中、之を切に切に果し、之を切に果し、
甲乙、之を切に切に果し、之を切に果し、
信じて、之を切に切に果し、之を切に果し、
中、之を切に切に果し、之を切に果し、
一生、之を切に切に果し、之を切に果し、
一生、之を切に切に果し、之を切に果し、
高橋、之を切に切に果し、之を切に果し、

